

小さな工夫 13

廊下での小さな働きかけを通して相互作用をつくっていく

廊下や教室などの場面で、こちらに反応させることが重要だと感じます。

例えば、授業中に教室から抜け出して、廊下をうろうろと歩いている子どもに出会ったとき、子どもがこちらに気づいて、サッと逃げてしまったり、パッと隠れてしまったときには、慌てて追いかけるようなかわりは、おすすめしません。こちらが子どもに反応させられてしまっ

子どもたちは、毎日、朝八時過ぎから夕方四時くらいまでの八時間近くを学校で過ごします。子どもたちにとって学校はまさに生活の場です。その中でさまざまなかわりが、子どもの成長を支えているのです。つまり、子どもを支援する立場としては、カウンセリングの場面だけではなく、学校生活の中でカウンセリングの理論や技法を活用していくことが重要なのです。また、学校生活の場面では、子どもたちと自然な流れの中でかわりを持つことができます。あらたまった場面設定をすることなく、その場にいるだけで、子どもにかかわっていくことができます。ところで、カウンセリング場面は閉じた場面ですが、日常の生活場面は開かれた場面です。子どもと自分という関係だけではなく、さまざまな要因がかかわってきます。そのため、カウンセリングの理論や技法を活用していくためには、独特の工夫が必要になってきます。そういった工夫について紹介していきます。

ているからです。子どもの行動にこちらはほとんど振り回されて、後手後手に回ってしまいます。いつの間にか、子どもと追いかけてっこをしているようになってしまいがちです。子どもにとって追いかけてっこは、自分を追いかけてもらっているという安心感のもと、大人との駆け引きを楽しむというきわめて意味のあるやりとりです。それに付き合っただけでも、本来は、大変意味のあることです。しかし、学校で授業を抜け出した子どもと追いかけてっこをすることは、学校の文化としてはかなり受け入れがたいものです。子どもをこちら側に「反応させて、こちらが安心できる場面設定の中で子どもとかわり合っただけで相互作用を保つことが、意味のある支援につながっていくと考えられます。例えば、こんな展開が生じたら理想的です。

中学校で授業時間に、校舎の階段を上がって角を曲がると、先のほうを二年生のB子が一人で歩いていました。足音に気づいたのか、こちらを一瞬だけ振り返って、やや足早に歩き始めました。B子は廊下の少し先にある階段へ曲がったのか、こちらからは見えなくなっていました。B子を追いかけてみようか少し迷いましたが、階段を降りれば、すぐに保健室や職員室なので、他の職員員の目にとまる可能性もあると考え、追いかけてB子が戻ってくるのを待つことにしました。廊下の壁に貼ってある掲示物を眺めているようなふりをしながら、しばらくその場に立っていると、B子が姿を現しました。こちらへ近づきながら、「何してんの?」と声をかけてきました。こちらは驚いた表情だけで応えて、また壁の掲示物に視線を移しました。B子は「何か書いてあるの?」とこちらに聞きながら、さらに近づいてきました。

教室での小さな働きかけを通して相互作用をつくっていく

教室で子どもとかわる場面でも、こちらに反応させることが効果的です。

小学校三年生のA男は、授業中に席を離れて、教室内を歩き回ってしまふことがよくあります。担任の先生が「A男くん、席に着いてください」などと声をかけても、まったく聞こえていないような様子で行動に変化がありません。やや声を大きめにして「席に着きなさい」と強く指示すると、反発するのは「んー！」などと大声を出しますが、席に着こうとはしません。つかまえよ

こんなふうには展開すれば、B子とのかかわりはすでに言葉でのやりとりになっています。このあとは、どうして授業中に一人で廊下を歩いていたのかなどについて、B子から話を聞くことができそうです。

もしB子を追いかけていたとしても、つかまえるのはかなり難しいでしょう。手をつかんだりすると、不適切な指導と受け取られかねません。また、B子が逃げるのをやめたとしても、反発する気分が強まって、こちらの質問や投げかけにはあまり反応がないかもしれません。追いかけるか待ってみるか迷うところですが、待ってみるのも十分に意味のある選択肢なのです。子どもがこちらの行動に反応することを通して、意味のある相互作用につながっていくと考えられます。

うと近づくと、慌てて逃げ出して教室から出ていってしまうこともあります。

担任の先生の言葉による指示には、反応しないというパターンができてしまっているのかもしれませんが。強く指示した場合も、拒否的な反応が生じて、先生の指示には従わないというパターンに陥っています。

私は、教室でこういった状況にある子どもにかかわるときがあります。担任の先生が授業をしている教室へ入ると、A男が歩き回っています。このとき、A男に座席に着くような働きかけをいきなりするのはおすすめでできません。小さな働きかけを通して、こちらとの相互作用をつくっておくのです。例えば、A男からこちらが見える位置で、担任の先生の説明に大きくうなずいたりして、A男の反応を見ます。A男が、先生や黒板をちらつと見るようならば、こちらに反応していると考えられます。また、意図的に鼻をすすったりして、その音に反応するかどうか確かめます。こちらをちらつと見てくるのであれば、少し反応しているので、その流れを維持するため表情で応えます。A男のほうから何か言葉をかけてきたときは、かなり大きく反応します。大きくうなずいたりして、こちらも応えます。

そういった相互作用が少し続いたときが、一つのチャンスです。A男が自分の座席に近づいたときに、A男に見えるタイミングで、A男の座席の椅子を座りやすいように引いてあげます。さらに、手を差し出して、座るように求めるしぐさをしてよいかもしれません。こんなふうになると、意外とすんなりと、子どもは自分の座席に座るものです。